人間の能力について

望月幸義

目次

一、序
二、ニュー・サイエンスとその意義
三、人間の能力と自己信頼
四、結び――普遍的道徳を求めて

一、序

「この世の中で一番大切なものは何ですか」という質問を学生にしてみるといろいろな答えが返ってくる。例えば、愛、友人、人間、真理、親、お金、人間関係などである。しかし、不思議なことに自分という答えは少ない。これらの答えはどれも必ずしも間違っているというわけではない。これらは、結局は同じことをいおうとしているのであろうが、自己または人間と答える方が多少とも正しいであろう。よく考えてみれば、結局そう結論せざるをえないのである。また、我々は意識的であれ、無意識的であれ、自己を最も大切と考えて行動していると考えられるからである。

現代は激動の時代であり、歴史の転換点（ターニング・ポイント）である。国際的にみても国内的にみても、種々の問題が山積している。核戦争の危機、資源・エネルギー危機、人口と食糧問題、東西並びに南北問題、環境破壊、公害、難民問題、また、犯罪、暴力、自殺、離婚、麻薬の使用などの社会病理現象である。これらが問題であるのは、そこに人間の生命や人格が十分に尊重されていないからである。つまり、どのようにしたら人間の生命を維持発展させ、人間疎外を克服し、真に生きがいのある人間性にあふれた人生を地球上の一人でも多くの人々に実現するかが問題になっているのである。すなわち、文明の危機の問題は人間の危機の問題である。すべての問題の根底にあるのは、人間性の喪失と人間性の回復の問題である。ここ二〇数年来各界で人間性を回復せよと要求されているが極めて当然な主張である。なぜならこの世界で最も重要なのは人間だからである。人間こそがあらゆるものに価値を付与する価値の根源である。しかし、よく考えれば当然であるこの命題も現実には忘れられているのが普通である。仕事とか財貨のために人間を犠牲にしている場合が極めて多いといえるだろう。問題はこの最も重要である人間をよりよく尊重するにはどのようにしたらよいかということである。

人類がかかえている諸問題解決の、地道ではあるが最も根本的な方法は、学問や人間の考え方や価値観の変革にあると私は考える。中でも重要なのは、人間の尊厳性を高めるための人間の精神（意志）の力を明らかにすることにあると信じる。そこで私は以下に、この人間の独自性としての精神の力を探求するのである。このことを基盤にして、人間の生命ばかりでなく、あらゆる生物の生命や宇宙の中のすべての存在が調和的に生きる全地球的な倫理基準確立のための方向が示されるだろうと考えるからである。ローマクラブの創立者アウレリオ・ペッチェイは、その著『人類の使命』の中で、「進化の現段階において人類の真の問題は、人類自身がこの宇宙にもたらした変化に文化的に歩調を合わせることができず、したがって、この変化に十分に適応できないことである。

だから問題は人間の資質であって、いかにして人間の資質を改善し得るかということである。（中略）問題は人間の内にあり外にはない。解決があるとすれば同じく人間の内にある」[1]と述べているが、この人間の内面の問題を考えたいのである。

ドイツの実存哲学者ハイデガーは、「今日ほど人間について多くを知り、様々なことを知っていた時代はない。今日ほど人間についての知識を迅速かつ容易に提示しえた時代はこれまでにない。しかしまた今日ほど人間とは何であるかについて知ることの少なかった時代もない。われわれの時代ほど人間が疑わしいものとなった時代はない」[2]と述べている。それから約半世紀たった現在、事情は変わっていないという面もあるが、もう一方では、人間の真の意味が探求され始め、明らかになりつつある時代が到来したといえる面がある。つまり、それは最近頻繁に目にするニュー・サイエンスの普及によって、真に人間を尊重する学問観や人間観が現れ、広がろうとしているからである。これはまさに人類におけるパラダイム（基本的考え方）転換が起こりつつあるものと考える。もちろん、現在人類が抱えている諸問題はあまりにも複雑で重大であるから、人類は破局に向かいつつあり、もはや解決不可能であるという悲観的な見解も数多く提示されている。それらの見解はそれなりに重要な指摘であり、諸問題解決への有益な示唆も多く含まれていることを認めるにやぶさかではないが、本小論ではより楽観的な面を提示したいと考える。

以下、ニュー・サイエンスの研究動向、人間の独自性の根拠、人間の能力の大きさとその開発方法、自己超越、普遍的道徳などの問題を考察する。

二、ニュー・サイエンスとその意義

(1) ニュー・サイエンスの特徴

人間と生命の問題を考える場合、最近普及の兆しを見せているニュー・サイエンスによってもたらされた知見は重要である。そこで、人間と生命という視点を中心にして、まずニュー・サイエンスについて概観しておくことにする。

ニュー・サイエンスあるいはニュー・エイジ・サイエンスという言葉は和製英語であり、その定義及びその範囲についてはまだ見解が一定していない状況であるが、一言でいえば、現代の物理学における素粒子の研究によって、これまでの科学における客観性の神話が崩れたことに端を発し、全体の統合の視点を積極的に取り入れる新しい科学観が、単に物理学の領域ばかりでなく、学問全体に広がってきた状況を指す言葉であるといえる。これは、分析的になりすぎた現在の科学の限界を超えようとする一つの流れである。このような流れが明確な形で大きな影響を与え出したのは、一九六八年、オーストリアのアルプバッハでアーサー・ケストラーなどが中心になって行ったシンポジウム「還元主義を超えて」以降であるといわれている。

ニュー・サイエンスがその限界を指摘した還元主義とは、ガリレオやニュートンの物理学以来、一般的になった科学観であり、対象を部分に分け、最終の構成要素に分解して研究するものである。これは、精神と物質、主観と客観、価値と事実を分け、対象である物質における客観的法則の探求をその課題としてきた。このような科学観は、単に自然科学ばかりでなく、人文科学、社会科学全般に広がり、一般的になった。このような方法の欠陥は、人間の精神や価値や感情を研究の対象から排除する傾向があることである。

一九二〇年代の相対性理論、量子力学などの研究においては、素粒子の運動は、これまでのニュートン物理学に代表される科学観では説明できないことが判明したが、当時においては、ミクロ（素粒子）の世界とマクロの世界（ニュートン物理学の世界）の法則はともに、それぞれの領域において妥当するものであり、相互に影響するものではないと考えられていた。しかし、その後の物理学の進歩と生物学、脳の研究並びに人間の意識や意志の研究などの進歩によって、素粒子レベルの研究成果が人間の生命や精神の研究成果と一致する面があることが示され、一層両者の研究成果の関連や人間の生命や意識の研究が盛んになってきたのである。

ニュー・サイエンスの特徴を一言でいえば、科学的と神秘的、合理的と直観的、競合的と協力的、分析的と総合的、断片的と全体的、男性的と女性的などの相対立する二つの活動のバランスの回復にある。[3] これによって、全体としての人間、価値と事実の統合、理論と実践の歩み寄り、歴史や宇宙の中に生きる人間などの可能性が開かれ、人間の生命、精神、意識、価値など、本来人間の最も中心的な事項の研究が進みつつあるのである。

もちろん近代科学の方法論ならびにその研究成果は、それなりに有効であり、妥当する点も多いものであるから、今後とも一層発展させるべきものであることは確かである。しかし、その方法が唯一絶対のものであるとして、人間の意識や精神の領域の研究までもこの方法を用いなければならないとしたりすることになれば、問題になるのである。

(2) 人間性心理学とトランスパーソナル心理学

ニュー・サイエンスの見解が示されている研究の領域は極めて広範にわたっているが、ここでは、人間性心理学と生物学を中心に取り上げることとする。

人間性心理学の出現には、その前段階として、一九世紀末からの生の哲学、現象学、実存主義の発展がある。これらは、知情意を備えた全体としての人間の研究を目的とするものであり、科学による人間疎外から人間性を回復しようとするものであった。これらを基盤とする人間性心理学は、一九六二年にマスローが中心となって、学会を設立したものであり、これまで心理学の主流を占めてきた行動主義や精神分析に対する批判から生まれたものである。すなわち、行動主義が、人間行動を刺激と反応（S―R）の図式で研究することによって、人間をいわば一つの機械とみなして研究していることに対して、精神をもった人間の研究としては不十分であることを指摘している。また、精神分析学が主として精神病者を研究の対象としていることに対して、これでは、正常な精神活動を行う人間の研究として不十分であることを指摘している。そして、これまでの心理学では、あまり扱われてこなかった愛、創造性、自我、成長、自己実現、自我の超越、責任、意味、至高経験などの項目を扱うことをその課題としている。この心理学は、還元主義を超えて、全体的、統合的な人間の意味を探求しているのである。[4]

この人間性心理学は、さらに、マスロー、ウィルバー、グロフなどを中心とするトランスパーソナル心理学へと発展してきた。これは個人の意識を超えた意識（トランスパーソナルな意識）の研究をし、マスローのいう至高経験、つまり愛情経験、美的・創造的・神秘的経験などにおいて示される人生における最も素晴しい経験を具体的に実現する方法を探求するものであった。ここにおいては、禅、ヨガ、冥想などの実践とその多く取り上げられ、意識の拡大や自己超越などが中心的問題となっている。

(3) 生物学の研究

次に、生物学の研究においても同様の傾向がみられる。生命については、従来二つの考え方がある。一つは、生命は物理・化学的には説明できないとする生気論であり、もう一つは、生命を無生物と同一とみなす機械論である。これまでは、どちらかというと、機械論が主流を占め、生命現象を要素に還元してとらえようとしてきた。その現代における発展が、生命現象を分子のレベルで理解しようとする分子生物学である。これは、一九五三年にワトソンとクリックによって、遺伝子中のＤＮＡ（デオキシリボ核酸）の二重螺旋構造が発見されたことにはじまり、その後、遺伝子の情報伝達の仕組みや酵素の機能に関係した分野などで急速に発達してきた。

しかし、このような機械論ないし要素還元主義に対しては、さまざまな点から疑問が提出されてきた。そのいくつかを紹介しよう。既に、今世紀初頭には、ドリューシュは、ウニの発生についての研究などを通じて、生命現象における秩序の増加と合目的的な行動が機械論的生命観と決定的に矛盾することに気づき、新生気論を提示した。その後、ベルタランフィは、生気論と機械論の対立を越えて、有機体論を展開している。彼は、生命の諸現象の特質として、①部分は多少とも全体に左右されること、②全体は時々部分には見られない特性や振る舞いを示すことを挙げ、その見解をまとめて、システムを分析すること（要素に還元して、それを再び総合するというのではなく、全体としてみること）、静的、機械的にみるのではなく、動的にみること、生体の一次的な反応性に注目するよりも一次的に能動的なものと考えることを挙げている。[5] さらに、熱力学の第二法則、すなわちエントロピーの法則だけでは、生命現象のすべては説明できないことから、負のエントロピーの概念が導入され、生命の秩序維持の構造や進化の解明が進んでいる。つまり、生命は常にエントロピーを排出しながら、自己の中で秩序を形成（すなわち、エントロピーを減少させること）、すなわち自己組織化しているのである。また、生命の開放系システムについての最近の研究は、自然と生命・人間の連続性の回復という大きな自然観上の転換をもた

らすものであるという。これは、一七世紀以来の機械論的自然観に対して、生命原理の復権、自然と生命・人間の一体性の回復といった方向を指し示すものである。

このような内容は、先の分子生物学においても示されている。すなわち、生命の最小単位と考えられた遺伝子は、単に機械論的には説明できない性質、つまり、遺伝子は決められた規則に従って動くロボットではなく、情報を常に選択している動的な性質をもっていることが判明したのである。その後、このような内容を示す研究成果が、プリゴージン、ベイトソン、ラブロック、ヤンツなどによって示されている。[6]

さらに、生物学の研究は、人間の精神と身体の相補的関係を明らかにしている。心身医学の研究は古くからある。「病は心から」、「医は仁術」などの言葉に示されているように、インド、中国、日本などの東洋医学には、伝統的にこのような考え方が存在していた。しかし、科学的な心身の研究が本格的に始まったのは、一九三〇年代のキャノンの研究やハンス・セリエの「ストレス学説」以降ということができるだろう。現代においては、このような研究が一層進み、心身が極めて密接な関係にあることが、さまざまな角度から示されている。

現代医学の問題の一つは、身体と精神を別々に考え、取り扱うことにあるが、最近では、バイオ・フィードバックの研究、東洋医学との歩み寄り、さまざまな精神療法の技術（例えば、心療内科）などが進みつつある。この点に関して、プラシーボ反応は注目できる。つまり、患者を益することがなくても気休めとなる薬をプラシーボというが、この薬理学的にはまったく無効なプラシーボが患者に「これをのむとよくなりますよ」といって与えられると、これを飲んだ患者の症状が改善されたり、消失したりするという。ワイルは、「私は、プラシーボ反応が効果的に働くには、三つの信念の相互作用が必要だと考えている。すなわち、患者がその治療法を信じること、医師がその治療法を信じること、そして、患者と医師が互いに信じ合うことである。」[7]と述べている。

なお、このようなニュー・サイエンスの動向は機械論的生命観に基づく科学方法論をすべて否定するものではなく、それとの調和を保ち、両者を統合することによって、価値を含んだ全体的、包括的な生命観を探求するものといえる。また、以下に述べる私の見解が、単に精神論だけではなく、心身の相互連関の事実を承知の上で、あえて本論では、精神の面を強調したものであることを付言しておく。

三、人間の能力と自己信頼

(1) 人間と動物の相違

私は人間は生きているだけで無限の価値をもっていると考える。このことは、肉親や親しい友人などを失った場合を考えればよく分かるだろう。つまり、その人の生命は何ものにも代え難いのである。それに比べれば、個々人の能力や性格の相違は微々たるものにすぎないだろう。以下、このことを基盤にしながら、人間と動物の相違、人間の能力の大きさ、至高経験獲得の可能性、自己超越について述べ、人間の精神の進化の可能性を探ることとする。

人間と動物の能力の差は圧倒的なものである。我々は人間に生まれついたために、この相違を当然のことと思っているが、そこには実に驚くべき相違がある。動物とコンピュータの能力の比較については、ヤングの研究があり、タコの方がコンピュータより頭のよいことを証明しているが、その理由はタコは経験から学びとることができる点にあるという。[8] また、人間とコンピュータの能力の違いについて、根本的な点で人間の方が優れていることが示されている。[9]

人間の精神の領域における独自性を明確にしたのは、マックス・シェーラーである。シェーラーによれば、人

間という言葉は二つの意味をもっているという。一つは、植物や動物の生命と共通している面であり、もう一つは、それらとは異なる人間独自な面である。この後者の意味を、シェーラーは宇宙における人間の特殊な位置として探求したのである。すなわち、シェーラーによれば、人間の独自性は、理性を含み、理性より包括的な意味をもつ言葉としての精神にあるとされる。この精神の内容は、世界開放的であること（環境世界から自由であること）、事物や思考や意識などを対象化することができること、自己意識をもつこと、生命体としての自己自身と世界とを超えることのできる存在であることなどが示されている。この精神は、「理性」の能力も含んでいるが、観念的思考ばかりでなく、直観、すなわち、本質についての直観をも含んでおり、さらには、好意、愛、悔恨、畏敬、感嘆、浄福、自由な決断などの意志的・情緒的諸作用も含んでいるという。[10]

このような人間の独自性はなぜ生じてきたのだろうか。人間と動物の相違の根拠については、多くの議論があるが、現在有力なのは、言語能力の相違にあるとする説である。G・ギュスドルフは、人間の世界は言葉の世界であると述べ、[11] 同様に、E・カッシーラーは、人間を「シンボル動物—象徴的動物」と規定し、次のように述べている。「人間は、ただ物理的宇宙ではなく、シンボルの世界に住んでいる。言語、神話、芸術及び宗教は、この宇宙の部分をなすものである。それらはシンボルの網を織る、さまざまな糸であり、人間経験の、もつれた糸である。あらゆる人間の思想及び経験の進歩は、この網を洗練し強化する。人間はもはや実在に直接当面することはできぬ。彼は、いわば、それを面とむかってみることができぬのである。[12]」

この点で、重要な見解は、沢田允茂の見解である。沢田も人間の独自性は、人間の言語の独自性にあるとして、次のように述べている。「人間の言語はこの他に、……人間のもつ物理的、自然的環境と、そのなかでの行動とは一応切り離された独自の存在領域をもっている。それは過去に伝達された言語による情報の記憶として貯蔵されている部分、およびそれらの情報のあるものと新しくはいってきた言語情報との色々な形での結合による新しい情報の生産増殖であり、かつそのような一人の人間の大脳のなかで生産された情報が、他人に（言語で）伝達され、複数の大脳のなかに散らばって存在しているということである。[13]」そして人間生活のあり方は、言語の働きが占める領域が増大するにつれて、言語情報の新しい組合わせを通じてその変化のスピードを増し、いわゆる文化の発展をひき起こすとしており、「その意味で私は人間の文化の創造性の根底にあるものとしての言語の働きを、ドーキンスのミーム（模伝子、meme）と同じレベルで捉えるために語伝子（ロゴーム）(logome) という語で表現したいと思う[14]」と提案している。沢田は、さらに、この言語の機能によって人間に超越者が導入されたとしている。沢田のこれらの指摘は、人間と動物の相違を考える上で重要な指摘であると考える。また、私が以下に述べる人間の能力の無限性もこの言語の能力と深い関係があることを指摘しておきたい。ただし、言語が人間世界の可能性を閉ざしているというボームの見解も見逃せないだろう。つまり、彼は「皮肉なことに思考や言語が、非合理的な憎悪や破壊的な暴力を際限なく継続させる主要な要因となっている[15]」と述べ、言語の具体的改革案（レオモード）を提示しているのである。

(2) 人間の能力の大きさと能力の開発方法

次に、人間の喜びと悩みの本質が人間の自己実現の欲求と関係があること、人間の能力向上のためには、潜在能力の大きさを知ること、能力と年令に関する偏見を改めること、潜在能力開発のためには、自己信頼が重要であることについて述べる。

人間の生きがいは喜びにあると考える。喜びの中心には感動がある。強い感動の際には我を忘れるとか、別世

界に生きているという感じになる。感動の要素は驚きであり、発見であり、あるいは悟りであるだろう。この喜びと悩みは、人間の向上心あるいは自己実現の欲求と密接な関係がある。ここで、自己実現とは、この言葉の最初の使用者であるゴールドシュタインによれば、「個人の未だ実現されていない可能性を実現しようとすることであり、現在の自己とは異なるものになろうとする努力である。そう努力することによってより完全な人間になる」[16]とされる。しかし、この向上心、自己実現のための努力は、必ずしも常にうまくいくとは限らない。むしろ挫折の経験の方が多いといえるだろう。自己の向上が順調にいっている時は、生きがいや喜びを感じ、成長を妨げられていると感じている場合は悩みが生じる。ここに喜びと悩みの本質があると考える。次のスピノザの言葉はこのことをよく示している。「喜びとは、人間がより小さな完成からより大きな完成へ推移することである。悲しみとは、人間がより大きな完成からより小さな完成へ推移することである。喜びは美徳であり、嘆きは罪である。」[17]

このように、すべての人は自己実現の欲求をもっているが、実際に自己実現している人は非常に少ないと考えられる。自己実現を妨げている原因として、マスローは、悪い習慣、貧困な文化環境、不適当な教育、西洋文化における本能否定の傾向、安定と保護を求めるより強い欲求の影響、能力伸張に対する恐れなどを挙げている。[18]

このような外的原因もさることながら、内的原因としては、自己に対する誤った見方、考え方にある。つまり、自分の能力や性格について、消極的・否定的に考えている点にあるといえる。「人間は生きているかぎり迷うものである」[19]といわれるように、悩みがあるということは、生きているという証拠なのかもしれない。しかし、悩みは苦しいから、それから脱却しようとして、いろいろと模索する。宗教に救いを求める人も多いが、書物に解決法を求める人も多いとみえて、書店には、宗教関係書やハウツー(how to)ものなど多数出回っている。これらの書物に共通している内容は、悩みの根源は、消極的・否定的自己像にあり、解決法はそれを積極的・肯定的自己像

に転換することにあるという。

積極的・肯定的自己像をもつためには、人間の潜在能力の大きさについて熟知する必要があるだろう。つまり、我々は自己の潜在能力についてあまりにも無知であるといえよう。これはまさに人間の浪費であり、物質の浪費以上に大きな問題であるだろう。人間の能力については、例えば、コーリン・ウィルソンは、「人間は当人が気づいているよりも一〇〇倍も強いものなのだ」[20]といっているが、これは決して誇張ではないだろう。人間の能力の大きさについて、以下説明しよう。

まず人間の脳細胞の数は約一四〇億あるとされているが、我々はその中の五パーセントから一〇パーセントしか使用していないことが、研究の結果明らかにされている。例えば、「人間の脳髄は、非常に大きな未使用の潜在的能力を持ち、幾人かのこの道の権威者は、多少とも独断的であるが—それを九〇%と査定した。」[21]このように九〇パーセント以上の潜在能力があることが判明して以来、アメリカでは、一九六〇年代にこの潜在能力を開発する運動が起こったが、オットーによれば、我々は現在の能力よりもはるかに多くの潜在能力をもっており、肉体的エネルギー、道徳的成熟、知的能力、社会的能力、感覚的能力、宗教的経験などの潜在能力を一層発揮できるという。[22]

さらに、この人間の潜在能力開発の障害になっているのは、人間の能力と年令についての偏見である。我々は、一般に人間の能力は二〇代後半から三〇代半ばで最高になり、その後は下り坂になると考えている。三〇歳前後の人が記憶力が落ちてきたというようなことをいっているのをよく聞く。しかし、人間の能力と年令の関係の研究が進み、我々の常識が一種の迷信に過ぎないことが分かってきている。例えば、『生涯教育の基盤』には、次のような内容が示されている。知的能力の減少は一時的なものではなく、ある種の知的能力に限定されている。タ

イラーとアナスタンによれば、能力の減少は、類推テスト、数字を並べるテスト、推理テストについて最も顕著であるが、言葉や数学のテストではほとんど見られないか、全く見られないこともあった。事実、ハヴィガーストは、スピードや高度の知覚的技術を要するテストでは、能力の低下がみられるが、経験やこつ(know-how)を必要とするテストでは、同様の低下は存在しないし、ハヴィガーストのいう能力は減少するのではなく、増加すると結論している。この結論は、他の多くの研究によって実証されており、青年期以降、知力は低下するという一般的、普遍的傾向が存在するというのは誤りである。タイラーは、ある種の知的能力は青年期以降も一定の水準に保たれ、場合によっては約六〇歳まで上昇するという。[23] 同様に、波多野と稲垣は、「社会の文化的環境が一定であれば、知能が、年をとるにつれて低下していくことは六〇代まではほとんど見られない、ほぼ同じ水準が維持される。[24]」としている。また、他の研究によれば、能力の上昇が六〇歳からそれ以上にまで可能なのは、成功した一部の人々であり、一般の人々は、四〇歳ころを頂点として能力は下降するという。

この問題について、現在最終の結論がでているとはいえないが、少なくとも常識的に考えられているよりも、ずっと高年になるまで能力は向上するといってよいだろう。この点から考えると、日本の学校教育の役割と社会教育の役割を真剣に考え直していく必要があるだろう。これはまた、現在普及しつつある生涯学習を進める上で、重要な基盤となるであろう。

次に、この潜在能力を伸ばす方法の一つとして、自己信頼の重要性について述べよう。ボルノーは、「この信頼感は、きわめて強い形成力だからである。教育者が仕事の成功を子供に信頼していると、その子は自分でそれを信じて、楽しい気持でそれに取りかかる。(中略)信頼とは、他人のなかに信じたそのものを、その他人のなかに実際に生みだす創造的な力である。[25]」と述べている。この信頼には、他者信頼と自己信頼がある。パーキィによれば、重要な他者(significant others)が学生を評価する仕方が、その学生の自己の学問的能力についての考えに影響を与えるという。つまり、このことは、先生がある学生を能力があると信じれば、その学生は能力を伸ばすようになり、能力がないと信じれば、能力が伸びないということである。このことは小学校の段階では特に重要であるが、中学校以上の段階においても大きな力をもっているという。[26]

この研究は、何人かの学者によって実証されているが、パーキィは、ローゼンタールとジェイコブソンの研究によって明らかにされた自己成就予言の効果について、次のように紹介している。「ローゼンタールとジェイコブソンの研究の基本的仮説は、学生は自分に期待されていることをかなりよく行うというものである。この仮説を検証するために、二人の研究者が、六五〇人の生徒をもつ公立の小学校で実験を行った。小学校の先生たちは、はじめに次のように告げられた。春に行われた能力テストを基礎にして考えると、この一年間で、約五分の一の生徒が精神的能力のかなりの増加を示すことが期待できると。次に、この先生たちは、高い潜在能力をもった生徒の名前を知らされた。実際は、これらの生徒の名前は実験者がでたらめに選んだものであったが、数カ月後、知能テストや他の検査を行った時、上記の潜在能力をもつ努力家とみなされた生徒たちは、他の生徒たちに比べて統計上有意に能力の向上を示す傾向がみられた。[27]」この研究は、企業内やその他の状況についても実験され、同様の結果が得られている。これは、ある人に対する他者の信頼がいかにその人の能力を伸ばすかを実証したものである。

この他者信頼は、信頼された人の中に自己信頼を引き出し、それが効果を生み出しているのである。したがって、自己成就予言の核心は自己信頼にあるのである。つまり、自己信頼と他者信頼は密接に関係している。また、逆に、自己信頼ができていないと他者信頼もできないということである。したがって、自他の能力を伸張する上

で、まず自己信頼、つまり積極的・肯定的自己像を作り上げることが重要である。ここで注意しなければならない点は、自己信頼であれ、他者信頼であれ、信頼の効果は、現在のその人の能力のいかんにかかわらないということである。また、この点と関連して、大きな目標をもつことの効果についての指摘も重要であろう。つまり、一般には、「精神一到何事かならざらん」、「少年よ大志を抱け」などの言葉で示されていることであるが、K・レヴィンは、「高く目的を設定した人は未来にかなり満足のゆく結果をえることができるが、目的を低く設定した人は、目的に沿った未来を形成することに失敗する傾向がある」[28]と述べている。

さらに、このような信念が脳のメカニズムに有効に働くという指摘もある。例えば、M・マルツは、我々の精神作用の変化が脳細胞の働きに影響していることについて、次のように述べている。「人間の脳と神経系統が、個人の目標を達成するため、サイバネティックスの既知の原理に従って目的的に作用していることを示す豊富な科学的根拠がある。」[29]また、エックルズは、「神経科学者のあいだには、一般的な意見の一致がある。つまり、あらゆる意識経験―すべての知覚、思考、記憶―は、その物質的対応部として、ある特定の空間的時間的活動を大脳皮質や皮質下諸核の広汎な神経回路網のなかに有しているというものである」[30]と述べている。この点の真偽の程は現在確定しているとはいえないが、おそらく今後科学的に明らかにされていくものと思われる。

以上述べたことは、人間の潜在能力が大きいこと、それを引き出す根本的方法が自己信頼にあるということである。これと同じような考え方が、すでに仏教の中に示されていることは興味深いことである。つまり、仏教では、すべての人間は仏性をもっているのに、そのことに気づかず、煩悩（欲望、怒り、無知など）によってその仏性を覆い隠していると教えている。仏教におけるさまざまな実践はこの煩悩を去り、仏性を輝き出させるためのものといえるだろう。これは、釈迦やその他の宗教者が述べている仏性とか神性の考え方と共通しているとい

えよう。釈迦は、『如来蔵経』の中で、人間が仏性をもっているのに、そのことに気づいていないことを示すため、蜜房のなかの蜜、皮殻に覆われた穀物、貧家の地下にある宝蔵などの一〇の例話を出している。蜜房の中の蜜の例話では、蜜房に蜜蜂が群らがつている場合、蜜をとるためには、蜜蜂を追い払わなければならないだろう。人間もこの蜜房のようなものであり、その心の中には、仏の本質が煩悩に覆い隠されているという。そこで、我々の心の中にある仏性を知り、それを生き生きと輝かすためには、それを覆い隠している煩悩を取り除かなくてはならないというのである。否定的・消極的自己像は、自己についての偏見であり、囚われであり、煩悩の一つである痴、つまり誤った知識によって生じているのである。換言すれば、自分で自分を縛っているのであるから、それを解決する力も自分にあるということである。このことを、山田無文は次のように述べている。「一時の感情と衝動によって、一生を暗くするか、堅実な自覚によって一生を明るくするかは、われわれの心一つであります。努力次第であります。そこでわれわれはまず正しい人間性を自覚し、明るい一生を送らねばならんと発心し、発願せねばならんと思います。〃迷悟われにあれば、発心すれば、即ち到る〃とはそのことであります。[31]」

(3) コーリン・ウィルソンの見解

この自己信頼は、人間の精神力（意志の力）の大きさを物語っている。意志や精神の力についての研究は数多く存在するが、ここでは、コーリン・ウィルソンの見解が明快であり、かつ至高経験を意図的に作り出せるとしている点で重要であると思われるので、その見解を紹介することとしたい。

『アウトサイダー』、『宗教人と反抗人』などで有名なコーリン・ウィルソンは、「自分の人生は至高経験探求の長い道程だった[32]」と述懐しているが、まずその著『賢者の石』においては、不老長寿の秘訣がどこにあるかを探

求して、結論として精神力にあることを示している。つまり、「生が意識であるならば、生の長さを延ばすという問題は、当然、意識を増大させるという―芸術ばかりか科学の目的である―問題にほかならないことになる」[33]、「寿命は意志によって保たれる」[34]と述べている。

次に、ウィルソンは、その著『フランケンシュタインの城』、『右脳の冒険』などにおいて、どのようにすれば至高経験が得られるかを探求している。ウィルソンによれば、この至高経験は、人間の意志（意味を発見し、それを実現しようとする意志）の強度に比例しているという。逆に、苦しみの原因は意志の弱化にある。そして、意志や意味について、「意味の世界に近づくほど、人間の生命力は超人的レベルに向かって増大する」[35]、「精神集中は深層からエネルギーを召喚する効果をもたらす」[36]などと述べている。我々は日ごろ、意志を受動に任せており、感覚が閉ざされているのである。ウィルソンは、心の中の努力（精神の集中）によって意識を一変させることができること、つまり意気消沈や落ち込みを至高経験に変化させることができることを発見し、それが右脳と左脳と小脳の働きをコントロールすることによって可能であることを示したのである。左脳は理性の働きをつかさどり、日常の問題を処理するのがその仕事であり、右脳は、感性の働きをつかさどり、意味や全体的パターンを与えるものであり、生命エネルギーを左脳へ供給しつづけるのが、その役目である。小脳は、習い覚えたことを機械化する働きをするものであり、ウィルソンはこれをロボットと呼んでいる。人間の生活にロボットは欠かすことのできない必需品かも知れないが、同時に、人生から生きがいを奪い去ってしまうのである。左脳は、このロボットと結合して、日常生活における習慣化された行動や考え方をとり、人間の至高経験の発現を抑えているという。つまり、現代人はこの左脳があまりにも支配力を強めすぎてかえって害になっているのである。そこで、ウィルソンによれば、精神を集中することによって、左脳をコントロールすること、つまり、人格の重心を左脳

から右脳に移すことによって、人格全体が拡大するような生き生きとした感情をもたらすことができるという。換言すれば、右脳と左脳が協力し合うと健康と幸福が生じるのである。

このようなことは、従来、禅、ヨガ、冥想、麻薬によって行われてきたことなのである。それと同じような効果が、わずかの時間の精神集中によって可能であることを示した点に、ウィルソンの発見の現代的意義があるといえる。

(4) 自己超越

次に、人間の意識の進化の中核となる自己超越についてのべよう。人間が向上心や自己実現の欲求をもっているということは、自己超越の欲求をもっていることであるといってよいだろう。換言すれば、我々が無意識的であれ、意識的であれ、より完全なもの、より統一的なものを求めているということは、宗教的にいえば、神ないし絶対者を求めているということになる。アウグスティヌスは、精神的に悩み抜いたあげく、ついに神を見出だし、「私たちの心は、あなた（神）の中に憩うまでは安らぎを得ることはない」（『告白録』）と述べているが、ここには、人間的真実が示されていると考える。これは、人間の自己超越の欲求と私は考える。

画家の林武は、一切の執着を捨て去った時、自分から解放され、すべての自然や人間が生命力をもった実在のものとして見えてきたという。そして、彼は、「同時に、地上一切のものが、実在のすべてが、賛嘆と畏怖をともなって僕に語りかけた。きのうにかわるこの自然の姿―それは天国のような真の美しさとともに、不思議な神魔のような生命力をみなぎらせて迫る。僕は思わず目を閉じた。それはあらがうことのできない自然の壮美であり、恐ろしさであった。（中略）そして感じることは、すべての名画が、僕の見たあのものを表しており、それ以外で

はないということだった。[37]」と述べている。

いうまでもなく、自己を超越することは、伝統的に西洋の思想にもみられるものであるが、ヒンドゥー教、仏教、ヨガなどにみられるように、東洋においては中心的課題であった。また、真に自己実現した人に共通に見られるものである。しかも、これはあらゆる道徳や宗教の教えに共通一貫している内容であるといえる。すなわち、自我を克服して、神の心、神の意志と一体となることである。このことをゲーテは、「死して、成れ[38]」といい、夏目漱石は、「則天去私」といった。また、仏教では、小我を去って、大我に帰一することを教え、キリスト教では、「自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者はそれを得るであろう」（『新訳聖書』マタイ伝、第一〇章三九節）と述べられている。道元が「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心をよび他己の身心をして脱落（とつらく）せしむるなり[39]」と述べていることも同じである。

既に述べたように、M・シェーラーも人間の独自性として、この自己超越性を挙げているが、ここでは、二、三の学者の例をあげておこう。『人格主義』の著者ムーニエは、「自己から出ること」、自己放棄の修業は人格生活の中心的修業である[40]」と述べている。また、フランクルによれば、人間は意味への意志をもった存在であり、常に自己があるべき姿を決定していく存在である。実存は本質的に自己超越にあり、我々は絶対的に最善のものに到達しようと常に努力すべきであるということになる。そして、人間は価値を認識し、実現するものである。人間は何物かのため、あるいはだれかのため、すなわち、ある大義のため、あるいは友人のため、あるいは神のため、まず自分を失うというところにまで達してはじめて逆説的に自分を発見するのであるという[41]。

自己を越える意識の探求は、トランスパーソナル心理学の中心的課題であり、多くの学者や修業者がこれを追究している。これは、全生命あるいは宇宙との一体感を伴なった意識体験が共通の基盤となっているのである。すなわち、K・ウィルバーは、シェーラーが展開した「精神」の内容をより詳しく、より神に近い次元にまで高めている。つまり、自我、超自我、超個的自己（トランスパーソナル・セルフ）、宇宙意識を区別し、その内容を説明している。ウィルバーは、精神分析、ヨガ行派仏教、ユング派の精神分析、ヴェーダーンタ学派、ゲシュタルト療法、精神統合などによって明らかにされた数限りない意識レベルの中から次の三つの主要な帯域を選び出したのである。つまり、（一）自我のレベル、（二）実存のレベル、（三）心のレベルである。この心のレベルは、一般には神秘的意識と呼ばれており、自分が根本的に宇宙と一つであるという感覚を伴なっている。そして、自我のレベルは精神、実存のレベルは精神と肉体を含むのに対し、心のレベルは精神と肉体と残りの宇宙を包括している。この三つのレベルの分類は多少意味合いを異にしているが、何人かの学者が述べているという[42]。ここには、人類の精神的進化の可能性が開かれているが、これ以上は述べない。

さらに、こうした意志や意識や精神についての見解が、現代の物理学の研究によって別の角度から述べてられていることを忘れてはならないだろう。この点について述べている書物は多くあるが、二、三の例を示しておこう。スペリは、「こういう意味の科学は、最高レベルの価値と信念の体系の形成を援ける主要な手段となり、『宇宙を動かし人間を創造した力』をよく理解し、それと一体となる最短の道となるのである[43]。」、また、ルネ・ウェーバーは、「宇宙の究極的本性が愛のエネルギーなのである。意識は宇宙のエネルギーと直結した管となり、宇宙エネルギーを自己中心的な追求のためにゆがめたり、その流れを変えたりすることなく、生きものや人間の世界にそれを万遍なく注ぐようになるのだ[44]。」と述べている。さらに、この点に関する最近の脳の研究も重要である。

例えば、ロイの『スフインクスと虹』には、最近の脳研究の情報が豊富に盛り込まれているが、中でも前頭葉が未来の予知能力や目的の実現や記憶の断片を全体に統合する能力をもつことが示唆されている点が注目される。[45]

四、結――普遍的道徳を求めて

最後に、新しい普遍的倫理（道徳）確立の必要について述べる。すでに多くの提案はなされている。まず聖者の示した思想や道徳の意義について、ヤスパースは、紀元前五、六世紀に世界の各地に聖人が人類に規準を与える人として現れたように、現代に新しい聖人の出現を求めている。[46] 同様に、ソローキンも、「善き隣人たちの前述の役割を別にすれば、聖者たちの果たす社会的機能は、ある社会の最高の善・最高の愛・最高の精神性の生きた顕現である。聖者たちは、道徳上の価値の領域における創造的な英雄であって、その生きた亀鑑（模範）である。利他という領域では、大多数の聖者たちは『愛のエネルギー』の体得者であり、創造者であって、最も純粋な性質の愛を大量に産出するのである。これらの『愛を生みだすこと』の達人たちがいなければ、社会は必ずその成員間に友愛と調和が欠如し、破局を迎えるようになり、致命的な憎悪や闘争の氾濫に動きがとれなくなるのである。[47]」そして、このような聖者たちの存在が、創造的で幸福な社会を実現する上で必要欠くべからざるものであるという。

次に、普遍的な道徳基準の確立については、例えば、スチョドルスキーは、「おそらく必要なのは、あらゆる地域的相違を越えて、人類のすべてに共通の新しい信念、精神である[48]」と述べている。また、広池千九郎が『道徳科学の論文』の中で示したイエス、釈迦、ソクラテス、孔子などの世界の諸聖人の思想と道徳に一貫する道徳原理としての最高道徳は、このような普遍的道徳原理を示した一つの重要な例示である。さらに、スペリは、「本質的に同じ結論が、一九八〇年、ワシントンDCでの聖職者全国会議の後援によるある会合でもひきだされ、プロテスタント、カソリック、ユダヤ教およびその他の信教によって、世界が必要とするものは新しい一つの教理であり、それは環境を保護し、エネルギー源の枯渇を防ぐような価値を促すものでなければならない、ということが満場一致で採択された。このような価値は、科学と新しい意味での倫理や宗教との合体によって生まれてくることは確かであろう。[49]」としている。

既に述べたように、人類の未来については、悲観論、楽観論が盛んに提出されているが、基本的に私は楽観論に立っている。少なくとも上に述べたように輝かしい人間精神の力がはっきりと意識的に開花できる段階にまで到達していることを考えれば、このように考えざるをえない。このことは、我々の倫理観を根本的に改めることにつながるだろう。つまり、いわゆる一般社会に行われている因襲的道徳の形式性や利己性を克服し、真に一人ひとりの人間を尊重し、人間の尊厳を確立する道徳が求められるだろうし、また、求められなければならない。それは、エコロジカルな点を考慮した倫理、つまり、人間の生命だけを大切にする倫理ではなく、地球上のあらゆる生命を大切にする倫理でなければならない。このことの中には、当然、一国家、一宗教などに妥当する倫理ではなく、すべての人類に妥当する倫理でなければならないことが含まれている。ここに人間の宇宙における特殊な位置があり、尊厳性もあるのである。

注

(1) A・ペッチェイ著、大来佐武郎訳『人類の使命』、ダイヤモンド社、一四頁及び三二頁。
(2) M・ハイデカー著、木場深定訳『カントと形而上学の問題』、理想社、二二五頁。
(3) C+Fコミュニケーションズ編・著『パラダイム・ブック』、日本実業出版社、二二頁。
(4) J・B・P・Shaffer, Humanistic Psychology, 一九七八、参照。
(5) ベルタランフィ著、長野・飯島共訳『生命』、みすず書房、二一頁。
(6) 前掲『パラダイム・ブック』参照。
(7) A・ワイル著、上野圭一訳『人はなぜ治るのか』、日本教文社、三〇一―三〇二頁。
(8) J・Z・ヤング著、岡本彰祐訳『人間はどこまで機械か』、白揚社。
(9) 『情報システムとしての人間』ヒューマンサイエンス②、中山書店、二〇六頁参照。
(10) Max Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos, 一九六六、参照。
(11) ギュスドルフ著、笹谷・入江共訳『言葉』、みすず書房、参照。
(12) E・カッシーラー著、宮城音弥訳『人間』、岩波書店、三五頁。
(13) 新岩波講座哲学『物質・生命・人間』、岩波書店、二三五頁。
(14) 同上書、二三六頁。
(15) D・ボーム著、佐野正博訳『断片と全体』、工作舎、八〇頁。
(16) 前掲Humanistic Psychology,十三頁　参照。
(17) スピノザ著『エチカ』第三部実現一一、参照。
(18) F・ゴーブル著、小口忠彦訳『マズローの心理学』、産業能率短期大学、九五頁。
(19) ゲーテ著、相良守峯訳『ファースト』天上の序曲、ダヴィッド社、一九頁。
(20) C・ウィルソン著、中村保男訳『フランケンシュタインの城』、平川出版社、九三頁。

(21) 国立教育研究所内フォール報告検討委員会訳『未来の学習』、第一法規、一三四頁。
(22) H・A・Otto,ed.Human Potentialities,一九六八。一一二頁
(23) Foundation of Lifelong Education, 二〇六頁。
(24) 波多野誼余夫・稲垣佳子共著『知力の発達』、岩波新書、一四六頁。
(25) ボルノー著、浜田正秀訳『人間学的に見た教育学』、玉川大学、六五頁。
(26) Human Dynamics in Psychology and Education, ed. by Hamacheck, 五四―五五頁。
(27) 同上。
(28) D・ロイ著、樋口覚訳『スフィンクスと虹』、青土社、一二〇頁。
(29) M・マルツ著、小野浩三訳『幸福への挑戦』、産業行動研究所、六頁。
(30) J・C・エックルズ著、鈴木・宇野共訳『脳と実在』、紀伊国屋書店、二二頁。
(31) 山田無文著『生活の中の般若心教』、春秋社、四五頁。
(32) 前掲『フランケンシュタインの城』、四頁。
(33) C・ウィルソン著、中村保男訳『賢者の石』、東京創元社、五七頁。
(34) 同上書、一七四頁。
(35) 前掲『フランケンシュタインの城』、二四頁。
(36) 前掲『賢者の石』、二八頁。
(37) 林武著『美に生きる』、講談社現代新書、六六―六七頁。
(38) ゲーテ著『西東詩篇』中、「浄短的な憧れ」、参照。
(39) 日本思想体系一二『道元』(上)、岩波書店、三六頁。
(40) E・ムーニエ著、木村他訳『人格主義』、クセジュ文庫、四九頁。
(41) フランクル著、高島・長沢共訳『現代人の病』、丸善、参照。
(42) K・ウィルバー著、吉福・管共訳『意識のスペクトル』、春秋社、一一頁参照。

(43) R・スペリ著、須田・足立共訳『融合する心と脳』、誠信書房、九六頁。
(44) 『現代思想』特集ケストラー、一九八三年六月号、青土社、二〇四頁。
(45) 前掲『スフィンクスと虹』、九二頁。
(46) K・ヤスパース著、重口英世訳『歴史の起源と目標』、理想社、参照。
(47) P・H・ソローキン著、下程勇吉監訳『利他愛』、広池学園出版部、二五七頁。
(48) R・A・Dave ed. Foundation of Lifelong Education, 一九七六、九〇頁。
(49) 前掲『融合する心と脳』、七頁。